

定年後は Having より Being

定年7年目に入った現在、シルバー人材センターで駅前の自転車管理の仕事をしています。JR青梅線の昭島駅南口の駐輪場。朝6時過ぎ、まず前日から残っている自転車の整頓、契約時間を過ぎた自転車への未収札付け、施設内の清掃から始まります。紙くず、ペットボトル、タバコの吸殻が脇の道路まで落ちています。

始業は6時半。忙しくなるのは通勤客の増える7時過ぎから8時半頃まで。一時利用者が殺到するからです。これに月末や月初は定期的利用者が更新手続きをするので、何人もが並んで待つといかに敏速に対応するかが勝負です。

電車の時刻に間に合わせるために、分、秒を急ぐ人。「まだなの?」。なかにはイライラ感をあらわにする人も出てきます。そんな時、“朝は混むってわかっているんだから、早目に家を出てくればよいのに!”なんて内心思いかげながらも、ともあれ“お客さま”ですから最善のサービスを心がけるわけです。

「おはようございまーす!」。こちらが声をかける前に、向こうから大きな声で挨拶してくれる人がいます。こちらが挨拶をしても知らん顔の人もあります。なかには「いつもご苦労さまですねえ」と、旅行帰りのおみやげ菓子を届けてくれる婦人もいます。はからずも、利用者のいろんな断面が見えてきます。

駐輪違反の自転車も出てきます。小さな子供やお年寄りもやってきます。そんなとき、規則にのっとりながらも“正義感派”と“人情肌派”によって対応が少々異なってくるのも、人の心の反映でしょうか。一日三交代制で、一時利用券、定期利用シール等の在庫残とお金が合っただけでその番の仕事の完結となります。



現場に就いて3年目。青い作業ユニフォーム。色からだけ見れば、まさに現役時代のホワイトカラーからブルーカラーへの転身です。朝、ごみで汚れた駐輪場の掃除をしながら、最初は現役時代の妙な誇りから、“こんなことをしていてもいいのかなあ”と、いっぺんの抵抗感もありました。でも、すぐにそれは吹き飛んでいきました。

まさに「職業に貴賤なし」です。いろんな立場で頑張っている市民と最前線での触れ合い。「おはようございます」「いつてらっしゃい」「お帰りなさい」「ありがとうございました」・・・体を動かすことと、大きな声を出すことが自分にも元気を与えてくれるのです。

定年後は年金でのんびりと趣味の生活——それもよいでしょう。でも人間はただ楽しいだけでなく、何か創造的なもの、あるいは他の人や社会に貢献できるものがあってこそ、より深い幸せや充足感を得られるものです。「定年後は、Having でなく Being が大切」だと言われます。財産や貯金を持っていること<Having>も大切ですが、今、何をやっているか<Being>が問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題だということです。

問題は、定年になって目標を見失ってしまう人がいることです。やる事がなくなると張りがなくなる。ギターや琴も、弦に張りがあってこそ、よい音色が出ます。張りのない人生は、スースーとかすれた音を出す楽器のようなものです。



シルバー人材センターの仕事は、そんな熟年者に働く機会を通して張りを提供してくれています。お金と共に、身体を動かし社会に役立っているという意識が“生きがいの糧”になっていると思うのです。私の場合、いただいたお金は「世界文学紀行」の旅費として活用、さらに大きな“夢の実現の糧”としてふくらませています。